

# 組織改変後の地質標本館

山田直利<sup>1)</sup>

## 1. はじめに

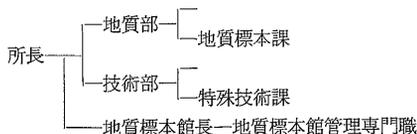
地質調査所では、1988年10月に、筑波移転後初めての全面的な組織改変を行った。その柱となったものは、地質情報センターの新設、地質標本館の部相当の組織への格上げおよび環境地質部における火山地質課の新設の3点であった。しかし、その背後には、東北出張所および名古屋出張所の閉鎖と北海道支所の縮小があったことを忘れることはできない。

これまで、地質標本館に関連する組織としては、所長に直属する地質標本館長(地質部主任研究官の併任)、地質標本館管理専門職(総務部業務課との併任)および地質部地質標本課の3つがあり、それぞれが別組織に属しているために、全体としての運営に円滑を欠くうらみがあった。

今回の組織改変により、これらはすべて“部”相当の地質標本館に含まれることになり、念願の“館”と“課”の統一が実現したのである。この改変に際して、地質標本課は地質標準課に名称を変更した。また、旧技術部の改組に伴い、技術部に所属していた特殊技術課が試料調製課と名称を変えて、地質標本館に加わった。これらの関係を第1表に示した。

第1表 組織改変と地質標本館

<従来の組織>



<新しい組織>



なお、地質標本館に関連して、従来から所長の諮問機関として地質標本館展示棟運営委員会が設けられており、この委員会は組織改変後も存続している。

本稿では、上記の組織改変前後から今日にいたる時期の、地質標本館の主な活動を追ってみる。

## 2. 入館者数の推移

最近の入館者状況を把握するために、開館以降10年間の入館者数の推移をまとめて第2表に示した。

第2表 地質標本館入館者数の推移

年 度	入館者数	開館日数	1日当たり 入館者数	入館者内訳		入館者内訳		
				団 体	個 人	茨城県内	他道府県	外 国
昭和55年度	17,726	140	126	7,318	10,408	10,509	6,913	304
“ 56 “	27,499	238	116	15,041	12,458	15,170	11,779	550
“ 57 “	36,495	239	146	22,907	13,588	20,110	15,589	796
“ 58 “	37,479	236	159	24,212	13,267	20,240	16,188	1,051
“ 59 “	43,099	237	182	29,209	13,890	23,650	18,290	1,159
“ 60 “	22,517	240	94	11,155	11,362	9,238	11,727	1,552
“ 61 “	27,161	244	111	14,967	12,193	13,545	12,627	989
“ 62 “	37,870	296	127	24,180	13,690	20,380	16,213	1,277
“ 63 “	35,720	288	124	22,396	13,324	21,453	12,704	1,563
平成元年度	30,736	270	114	19,637	11,099	18,511	10,914	1,311
総 計	316,302	2,433	130	191,022	125,280	172,806	132,944	10,552

1) 元地質標本館長、三井金属資源開発(株) 〒140 東京都品川区大井1丁目23-1

キーワード：地質標本館，組織改変，展示

この表に示されるように、年間入館者は、開館後5年目の昭和59年度の43,099人が最高で、その後は大きくみて減少の傾向にある。日本の他の博物館の場合でも、開館後しばらくは入館者数が増加するが、数年後には減少しはじめるというのが通例であり、地質標本館も例外ではないということになろう。

しかし、この表には、地質標本館の特殊事情も反映している。上記のピーク年の翌年の昭和60年度は、過去最低の22,517人に落ちこんでいるが、これは同年度に筑波で開催された国際科学技術博覧会の影響を受けたためである。逆に、外国人の入館者は1,552人と、それまでで最高の数となっているのも、興味深い。

その後、昭和62年度には、37,870人と2度目のピークを迎える。昭和62年度からは、月曜日休館を取りやめ、また年末・年始の休館日を大幅に減らしたが、このことも入館者数の増加につながったと考えられる。

昭和64年(平成元年)1月からは、隔週週休二日制が国の行政機関に一齐に導入され、当標本館もこれに合わせて毎月第2および第4土曜日は閉館のやむなきに至っている。平成元年度の入館者数が30,736人と、前年をかなり大きく下廻っているのは、一つにはこのことも影響していると思われる。

今後は、県外(とくに東京周辺地域)に対するPR活動を一段と強めることにより、入館者数の増大をはかる必要があろう。

### 3. 入館者30万人を超える

開館以来の総入館者数は、昭和58年9月4日に10万人、昭和61年10月14日に20万人と、それぞれ3年の期間を置いて到達している(神戸・滝沢, 1987)。このことから推して、30万人達成は平成元年(昭和64年)の秋頃であろうと予想されていた。

平成元年の夏に入ってから、入館者数は増加の一途を辿り、同年8月の入館者数は4,440名で、前年同月の4,223名を超え、開館以来の月別入館者数の最高を記録した。このような事情により、30万人目の入館日は、予想より大幅に早く、平成元年8月18日(金)となり、記念すべき入館者は、東京都江戸川区立小松川中学校2年の岩上啓子さん、その直前・直後の入館者は、同校2年生の日賀野裕美さんと千葉県浦安市舞浜小学校6年生の松原伸晃君であった。

当日は、江戸川区教育委員会の主催する理科研究行事として、同区内の理科の好きな中学生130人が、バス3台を連ねてつくばを訪れた。午前中は、工業技術院共用講堂の一室で館長の普及講演(“日本アルプスとフォッサマ



写真1 30万人目の記念品を手にする岩上さん(中央)、日賀野さんと松原君。くす玉と垂れ幕は水海道市の増淵徳氏から寄贈された。(安宅義雄氏撮影)

グナ)を聞き、早目の昼食をとった後、生徒たちが続々と標本館の方に移動したが、12時10分頃に入館した岩上さんがちょうど30万人目になったのである。

この瞬間、標本館エントランスホールの天井から吊り下げられていたくす玉が見事に開き、「祝 地質標本館入館者30万人突破」ののぼりが垂れ下り、詰めかけていた報道関係者のフラッシュが一斉にたかれた。このあと、石原所長からお祝いの言葉があり、つづいて館長から記念品が手渡された(写真1)。岩上さんへの記念品は、西ドイツ産ジュラ紀ムカシカブトガニ、前後賞はポリビア産デボン紀三葉虫化石(いずれもレプリカ)であった。

「入館者30万人突破」のニュースは、読売・日経・産経・朝日・毎日・いばらき・常陽の各紙に掲載され、また当日のNHKテレビや茨城放送でも流された。

### 4. 年々盛んとなる夏休み相談日

昭和58年から始まった「岩石・鉱物・化石の相談日」は、つくばでの恒例の行事として、子供たちに親しまれるようになっていく。

昭和63年度は、8月22日に第6回の相談日を開設した。相談件数は当日だけでも53件、翌日以後のものを加えると58件という大盛況ぶり、前年36件を大きく上廻った。持ちこまれた標本の種別は、岩石36、鉱物14、化石10、その他4で、所内の延18名の研究者が対応した。つくばという土地柄だけに、外国産の石も結構持ちこまれて、相談を受ける方が一苦勞する場面もあった。

翌平成元年度は、8月25日に第7回の「夏休み相談日」を開き、前年をさらに上廻る67件の相談を小・中学生から受けた。標本の種別は、岩石44、鉱物19、化石18で、地域別では、学園地区から37、県内28、都内2であった。所内の13名の研究者（内新人3名）が相談に応じた。

## 5. 展示内容の更新

昭和63年度および平成元年度に実施した展示内容の更新のうち、主なものを以下に記す。これらのほか、第1展示室の新着標本コーナーでは、随時新しい標本を展示して、地質調査所の最新の研究成果を被露している。

### 恐竜の糞・卵化石の展示（昭和63年6月から）

第1展示室「恐竜アロサウルスの足跡」のそばに、米国ユタ州産ジュラ紀草食恐竜の糞の化石と、バリ盆地産白亜紀ヒブセロサウルスの卵（レプリカ）を新たに展示した。自由に触れることのできる標本で、子供たちは大喜び。新聞やラジオも早速これを紹介した、なお、この展示について一番多い質問は、「どうしてこれが恐竜の糞だと分かるのか」、「なぜくさりやすい糞がメノウのような硬い石になって残るのか」の2つである。

### 隕石の展示（昭和63年11月から）

第1展示室「地質年代」のコーナーに、竹ノ内隕石、九州隕石、メキシコのアジェンデ隕石の3点を展示し、「宇宙からのメッセージ」と題する解説パネルを作成した（地殻化学部田中 剛氏の協力による）。とくに、明治13年兵庫県和田山町（旧竹ノ内村）に落下した竹ノ内隕石は、内務省地質課のドイツ人技師オスカー・コルジュルトによって分析され、その結果が地質調査所報文分析之部第1冊（1881）に掲載されており、科学史上も貴重な資料である。

### デスモスチルス全身骨格完成（平成元年3月）

1977年に北海道歌登町で発掘されたデスモスチルスは、下半身のクリーニング未了のまま、標本館開館に合わせて骨格レプリカが展示されていた。その後東京大学医学部犬塚則久氏の指導により、全身骨格の復元が完成した（犬塚、1989）。なお、従来の骨格レプリカは、北海道支所に送られ、新庁舎の1室に展示されている。

### 三疊紀美祢層群産植物化石の展示（平成元年4月から）

山口県美祢市桃ノ木の国道付替工事現場から採取されたもので、美祢市教育委員会から寄贈された。長さ1.5m、重さ0.7tの大型標本で、試料調製課製作の架台に載せて、玄関右側に展示した（写真2）。尾上 亨技官のクリーニングならびに鑑定作業により、シダ類・トクサ類・イチョウ類・球果類など多数種の化石を含むことが判明している。

### ウタツギョリュウの展示（平成元年6月から）

宮城県本吉郡歌津町の三疊紀稲井層群から産出したウタツギョリュウ（海棲ハチュウ類）を、第1展示室「北上山地の地質」コーナーに展示した。世界で最も古い魚竜とされている。これは東北大学地質学古生物学教室所蔵標本のレプリカである。

### 秋田駒ヶ岳火山模型の展示（平成2年3月から）

第3展示室「火山及び火山岩」の活火山シリーズのうち、秋田駒ヶ岳火山の部分が長らく空白であったが、須藤 茂技官の指導により、5万分の1地質図幅「雫石」に基づいて作成、展示された。

### 関東平野地質模型の改修（平成2年3月末から）

この模型については、かねてから、「データが古い」、「地質図表現がよく分からない」などの点で、改修の必要が叫ばれていたものである。この改修のため、平成元年7月から下記のメンバーによる討議と作業が進められ、全面的に塗り直しが行われた。このうち、地表地質は最新の20万分の1地質図幅などの資料により、また地質断面についてはボーリング資料の見直し、物探データの検討などを行って作成した。特に新しい点としては、基盤岩の地体構造が示されたこと、地質断面図に弾性波速度が書き込まれたこと、段丘堆積物の模式断面図が付けられたこと、などが挙げられる。

作業委員会メンバー：酒井 彰・牧本 博（基盤岩）、小玉喜三郎（第三系）、遠藤秀典・磯部一洋（第四系）、長谷川 功（地下構造）、山田直利（総合調整）

なお、本模型改修に当たっては、地殻熱部笹田政克氏から筑波山付近の花崗岩類につい

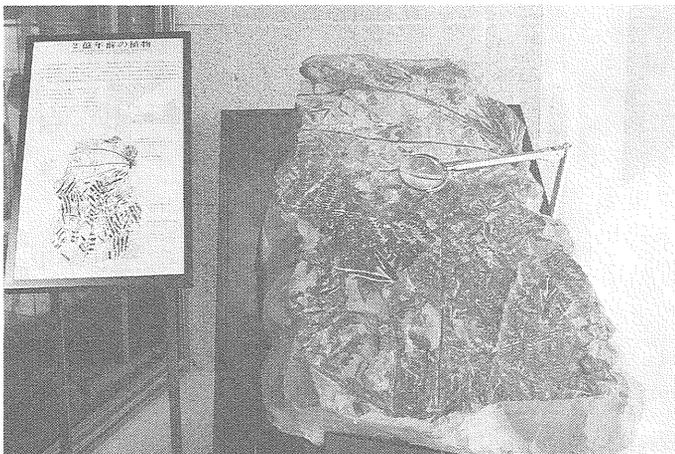


写真2 よみがえった2億年前の植物（玄関右側の展示）

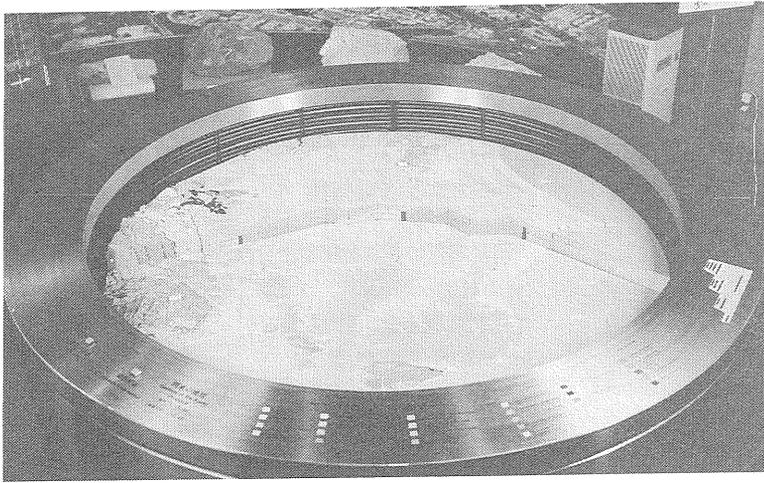


写真3

生まれ変わった関東平野地質模型  
地質断面には最新の情報に基づく基盤岩の構造が、また右隅には第四紀層の模式断面が描かれている。(山口秀樹氏・斎藤賢二氏撮影)

て、また名古屋大学坂本 亨氏から筑波山北方の第四系について、それぞれ未公表資料を提供していただいた。

#### 展示解説資料の発行

第4展示室には、常時、岩石標本100点、鉱物標本約400点、化石標本約400点が展示されており、学術的に最も重要なコーナーである、しかし、これらについて従来、標本リストや解説文は作られておらず、その作成は博物館としての地質標本館にとって最重要の課題であった。

上記の展示標本のうち、まず岩石標本について(山田・松原, 1988)が、つづいて化石標本について(尾上ほか, 1989a; 神戸ほか, 1989; 佐藤ほか, 1989; 尾上ほか, 1989b)、それぞれ標本リストと簡単な解説が作成され、地質ニュースの「地質標本館だより」に、分割して掲載された。これらの別刷は希望者に配布している。鉱物・鉱石標本についても引きつづいて作成準備中である。

一方、一般の見学者向けのガイドブックの必要性も、以前から唱えられていたが、これについては、長年地質標本館管理専門職として標本館の維持・発展に貢献された瀧澤朝代氏の努力により、平成2年3月末に、「地質標本館見学の手引き」(B5版, 15ページ, カラー)が印刷され、希望者に貸し出しや配布を行っている。

また、開館当初につくられた地質標本館絵はがき(日本産業技術振興協会発行, 12枚1組)も残部僅少となったため、内5枚(特に標本関係)を撮り直し、平成元年末に新版として新たに印刷・発行した。

## 6. おわりに

以上のべた以外にも、映像展示室へのビデオプロジェクターの導入(平成元年3月)、東大通りに「地質標本館」

「GEOLOGICAL MUSEUM」の道路標識の設置(平成2年3月; 写真4)など、標本館をめぐる環境は著しく改善された。これらは組織改変によって所内で地質標本館が正しく位置づけられるようになったことに大きく関わっている。標本館の前途には、展示内容の抜本的更新、休日閉館問題など、難問題が山積しているが、地質調査所の“顔”として、研究活動の“土台”として、さらに市民の学習の“場”として、今後益々発展することを願ってやまない。

最後に、館長として勤務した2年間、絶大なご支援を頂いた所内外の多くの方々に、誌面をお借りして心からお礼申し上げます。

<受付: 1990年5月18日>



写真4 東大通りに設置された地質標本館の案内標識  
遠来の団体見学者のバスが地質標本館の入口が分からず探し廻る心配も、これで解消した。(渋谷玉己氏撮影)